



Miho

好きなのに、しなかったこと	2
自分らしさ	9
やりたいこと	11
ゆるすこと	14
目には見えないもの	23
メッセージ	26
再会	29

好きなのに、しなかったこと。

「もうわがままは言わないから。これで最後にするから」心の中で親と自分に、固くそう約束して、私はロシア留学へ旅立った。

このときの私には思いもよらなかった。まさか、この約束が、15年もずっと自分自身を縛りつけることになるなんて。

ロシア語との出会いは小学生の時。テレビのチャンネルを適当に回していて、たまたま画面に出てきたNHK教育テレビのロシア語講座。見た目はとてもよく似た文字でも、発音が違うという内容だった。その音の違いを何度も繰り返していたが、さっぱりわからなかった。でも、面白いなと思った。どこがどう違うのだろう？

その思いをずっと私は胸の中に持ち続けていた。高3になり進路を決める時、大学でロシア語を専攻することにした。ロシア語の勉強はかなり難しかったけれど、とても楽しかった。

厄介な文法と格闘するのも嫌だと思ったことはない。辞書を引き、参考書を開き、新しい言葉たちと出会うことに喜びを覚えた。たどたどしいながらも、ロシア人の先生や留学生たちとロシア語で会話ができると、本当に嬉しかった。

大学1年の冬、級友や先輩たちと一緒に初めてのロシア旅行をした。

薄暗く何とも陰気な空港を出ると、鉛色の重たい空の下、モスクワは凍っていた。信号待ちで立ち止まっていると、自分が足下から氷の塊になっていきそうだったし、鼻の中ではチリチリという音が奏でられていた。ゴースパヂ！(Oh my God!)ロシアの冬は鼻毛まで凍らせる。

キオスクと呼ばれる小ぶりの箱型のお店がひしめく大通り。土産物屋のショーウィンドウに、ずらりと並ぶ色とりどりのマトリョーシュカに、ふかふかの毛皮の帽子。モスクワきっての観光名所・赤の広場で、観光客相手に熊との2ショットを、熱心に売り込む写真屋のおじさん。氷点下の気温をものともせず、路上でアイスクリームを売るでっぴりとしたおばちゃん。そのアイスをおいしそうに頬張る、お人形のように愛くるしいロシア娘たち。

なにもかもが日本とはまったく違う。なにもかもが想像を超えていた。日本からすると不便きわまりないと感じることも、たくさんあったけれど、それすら「かわいい」と思えた。

旅慣れた人によると、ロシアは好き嫌いが分かれる土地らしい。また行ってみたいと思うか、もう二度と行きたくないと思うか、両極端なのだと。私は完全に前者だ。

それから大学のお休みを利用して、何度かロシアを訪れた。訪れるたびに魅了された。

ロシアの人たちは一見無愛想だけれど、ひとたび心を開けば、とても人懐っこく表情豊かで温かい。そのうえ、お客を呼ぶのが好きでもてなし上手。いったい何軒のお宅で心づくしの家庭料理をいただいたことだろう。

ロシアのボルシチはビーツが決め手の鮮やかな赤ワイン色。生地から手作りのピロシキには、春雨なんて入ってはなく、具のヴァリエーションも実に様々で、まるで日本のおにぎりのよう。ひとたび本場の味を知ったら、もう日本のボルシチもどきや、ピロシキもどきには騙されない。

私はロシアの虜になった。もっとロシアを肌で感じたい。ロシアへ留学をしたい。

思い切ってこの気持ちを両親に伝えてみた。声が震えた。

しかし、留学させることを渋る家族は、この思いを単なる「わがまま」と一蹴した。

これまで、自分のわがままでは、あまり言ってこなかったと思っていた。どちらかという、親や姉たちの顔色を窺いながら過ごしてきたつもりだった。

仮にわがままを言ったことがあったとしても、それは、「夕ご飯にカレーが食べたい」というような他愛のない要求のつもりでいた。

さすがにロシアへの留学は、それと同列には考えていなかったけれど、留学に対する風当たりが予想以上に強く、戸惑った。

どうしてわかってくれないの？

したくもない喧嘩までしてしまった。

でも、私も譲れなかった。

人生最後で最大のわがままを聞いてもらおう覚悟だった。

大学を卒業した1997年の春、モスクワに飛んだ。

一般の家庭でホームステイをしながら、ロシア語の個人レッスンに通った。先生のとついで、モスクワ大学の日本語科に通う学生に、日本語を教えるバイトもした。

日本で友人になったロシア人のママに、美術館へ連れて行ってもらったり、自分で安いチケットを探してオペラに行ったり、ステイ先の家族と劇場に通ったりした。

休日には、現地で友達になったモスクワっ子たちと、いろんなどころへ出掛けた。森に行ってきたのこ狩りや、シャシリクというロシア風バーベキューをしたり、湖でボートに乗ったりと、地元の人ならではの過ごし方をたっぷり教えてもらった。

もちろん、不愉快な経験もあった。

アジア人という外見上、道を歩いていて見ず知らずの人にいきなり罵られたり、子供にからかわれたりすることはしょっちゅうだった。

また、長距離鉄道の切符を買いに行った時には、窓口をたらいまわしにされた挙句、明日もう一度出直してこいと言われたこともあった。

でも、そういう出来事があったとロシアの友人に話すと、彼らも一緒になって本気で怒ってくれた。

ロシア滞在中に毎日ロシア語のシャワーを浴び続けたおかげで、日常会話に困ることはなくなった。友達が仕入れて聞かせてくれる下ネタ満載のロシアン・ジョークにも、何度も大笑いした。

約一年のホームステイ留学からの帰国後、ロシア関連の職にはずっと就かずにはいた。

人生最後のわがままを聞いてもらったことが、今でも悪いことをしたように思っていた。

そんな後ろめたさから、ロシアで過ごした日々のお話も家族にあまりできなかった。

あるとき、あれほど行きたいと思った留学であったことを思い出し、一度ロシア語枠で就職したことがあった。自分を試したいと思った。

しかし、せっかく入ったものの、会社そのものが立ち行かなくなり、半年ほどでそこを去ることになった。

なんとなくロシア語での仕事には縁が無いのかなと弱気になり、ロシア語とは関係のない仕事を転々とした。

それでも趣味として、独学でロシア語の勉強は続けていた。学ぶことはやはり好きだったし、何より、ロシア語に触れていたかった。

ある長期派遣の契約終了が半年後に迫った2011年の10月、今の仕事が終わったらどうしよう、と思った。うろたえた。だって、何も見えてこない。

この先も派遣で働くのかなとぼんやりと思った。派遣という働き方は嫌いではなかったから。でもそう思いながらも、そういう選択のしかたで良いの？ ともう一人の自分が問いかけてくる。自分の人生の選択を、「嫌いではないから」という理由で決めてしまっただけで本当に良いの？

これが好きだから。これがやりたいから。そう言えることを、これからの自分はしたいと思った。

そうはいっても働かなければ生活できない。でも、生活のためだけの仕事はもうしたくない。でも、じゃあどうするの？ 何をするの？ 私は一体どうしたいの？

ロシア語を使って仕事をする？ 留学もして、何だかんだでずーっと勉強をし続けているけれど、そのくせ胸を張って「ロシア語が出来ます、ロシア語が好き」と言い切れないうちでいた。そういう自分にも、もやもやしていた。

この先の自分が全く想像できなかった。自分の足場をどこにどう定めたら良いのか、わからなかった。将来どころか、今現在の自分がしたいこともわからない。何とも言えないもやもやした気持ちがあった。変わりたいと思っている自分がある。

その一方で、変化を求めて失敗するくらいなら、このままでいた方が楽かもしれないと思う自分もいる。堂々巡りのもやもやの中で、もがいている。それが私だった。

そんな時、ひょんなことから、堀口ひとみさんのサイトに行き当たった。あらゆる点で自分に自信を持たずにいた私は、特に自信のない「おしゃれ」に関してまずは苦手意識を克服しようと思った。

何かヒントになるページは無いかと、「おしゃれ」のキーワードで検索を掛けた中に、堀口さんのブログのおしゃれコンサルの記事があった。クライアントの方と一緒に買い物に行き、そこでクライアントさんに似合う服を、みつろってくれるというものだった。

「へー、すごいなー。私なんて自分に何が似合うかもよくわからないのに、この人は他人に似合う服まで選べちゃうんだ」

なんとなく興味を覚えて、プロフィールを覗いてみた。

そこで初めて「コーチング」という言葉と出会った。何かに導かれるように、『ひとみずお1、2、3』、そして、『かないずお』をダウンロードして読んだ。

ひとみずおを書いた人たちは、みんなどこかの部分で私と似ていた。私そのものだった。堀口さんのコーチングを受けたら、私が今抱えているもやもやも晴れるかもしれない、と思った。思いつつ、迷った。

見ず知らずの人に、どこまで自分をさらけ出すことができるだろう？

家族や友人にも、自分の思っていることを多くは語らない私が、果たしてセッションで話すことができるだろうか？ 正直、10万円強という金額も一介の派遣OLにはかなり痛い出費になる。

さんざん悩んだが、10月の申込枠があと残りわずかになったという一文を見て「このタイミングを逃したら何も変わらないままだ」という気持ちが勝ち、その勢いで申込ボタンをクリックした。

そして、3ヶ月後に思い描く自分を考えた。自分に自信を持っている。自分が好きなことを「好きだ、好きだからやっている」と、胸を張って言える。自分の中にしっかりとした核がある…。それが何かは、具体的ではないが、何かを見つけたいと思った。

夏のガラガラした暑さが落ち着き、じっくりと何かに取り組みたくなる季節。私は私と向き合う準備を始めた。

自分らしさ

セッションを受けるにあたって、考察のための質問集がメールで送られてきた。

ひとつひとつの問いにじっくり取り組み、何度も書き直したりした。本当に何度も何度も自分の言葉を選びながら書いた。特にどういう書き方をしてください、ともいわれていないから、こんなのでいいのかな？ と自分の中の基準で書き終わりを決めた。

セッションの日、その質問集の話から始まった。

「かなりじっくり書いたんですよ」と思わず愚痴をこぼしたくなるくらい、結構大変だったので、そう堀口さんに言った。堀口さんは、「真面目ですねー！」と返してきた。

え、そうなの？ みんなそうやって書いてるんじゃないの？ でも、みんなって誰？

そういえば、ふと思い出した。私は小さい時から真面目と言われることが多い。

真面目と評されると何とも居心地が悪く、ものすごく嫌だった。それは自分ではない気がしていたし、そう言われることで、周りから距離を置かれている気がしていた。

小中学生のころ、真面目だねって言われることはあっても、一緒に遊ぼうって言われることは少なかった。真面目だなんて思われなくていいから、一緒に遊びたい人と思われたかった。寂しかった。

「真面目」を褒め言葉だと思えたことは、一度もなかった。どうしてみんな私を「真面目」って言うんだろう？

しかし、「かなりじっくり書いた」という苦勞した気持ちを、堀口さんが受け止めてくれたように感じたことで、このとき、「真面目」をいい意味で言われた感じがしたのだ。

不思議と不快感はなかった。

ある時、私が利用している語学学習サイトで、日本人読者からロシア語についての質問をされた。私は自分なりの考えをまとめて返信した。私の回答を読んだその読者の方は、とても丁寧な内容で大変驚いたと返事をくれた。ことさら手を掛けた返信をしたつもりではなかった私は、逆に驚いた。

このやりとりと、考察集に関する堀口さんとのやりとりが頭の中でリンクした。

「あ、私って真面目なのかな」と思った。

それから数日後の夜中、ふいに目が覚め、眠りに戻れないままつらつらとそのやりとりを思い返していた。すると、なぜだか急に「ああ、私は真面目なんだ」と腑に落ちた。

その瞬間、涙があふれた。これまで受け入れられなかった自分の「真面目さ」を初めて受け入れられた。自分が喜んでいる。そういう涙だった。涙は温かく、優しかった。

昔から言われ続けてきた「あなたは真面目ですね」は、私のありのままの姿だった。みんな事実を言っているにすぎなかった。

私の中ではごく普通のことすぎて、受け取れていなかった。そこにマイナスの評価を加えていたのは誰もいない私だった。自分の普通に価値があることを初めて知った。

やりたいこと

大学卒業後も何かしらの形でロシア語の勉強を続けているけれど、どう活かすか考えあぐねていることをセッションで話した。

「これだけ続けているってことは、ロシア語が好きなんですね」と堀口さんに言われたとき、「あ、そうか、私はロシア語が好きなんだ」と今さらながら気づいた。心は正直だ。好きじゃなければ、楽しくなければとっくに放棄していただろうから。

意外にも、私に対して「ロシア語が好きなんですね」と言ったのは、堀口さんが初めてだった。もしかして、それまでの私は、「ロシア語が好き」という空気をまとっていなかったのだろうか？　そういう気持ちを封印していた？　だから、誰も私にそう言わなかった？

堀口さんの発する言葉には、特定の色や温度がない。必要以上に熱くもなく、冷たくもなく。良いとか悪いとか、好きとか嫌いとか、そういった評価や感情も潔いくらいに無い。

だからこそだろうか、びっくりするくらい真っ直ぐに心に届く。深層心理に問いかけて、私自身が心の奥に保存しているものを、絶妙なタイミングで外へと引っ張りあげてくれる。そうすると、私も気付く。あ、私はこの問いを待っていたんだ。シンプルな問いには、答えも自ずとシンプルになる。

「好き」ということを確認できたら、ロシア語を使って何かしたいとスムーズに思考が進む。その時頭に浮かんだのが、自分が利用している語学学習サイト。以前、登録をし、時々日記を書いたり、質問メッセージに答えるなどして、ごくたまに使っていた。

「実は、語学学習サイトに登録してるんですけど・・・」

「はいはい」

「そのサイトをもっと活用したい…。あ、ロシア語でブログ書こうかな」

「いいですね！」

そう言われると、好きなことをするってこういうことなのか、と思った。

好きなことをするには、大層なことをしないとけないと思っていたが、好きなことを始めるには、できるところからでいいのかと、急にハードルが下がった気がした。

そして、語学学習サイトで、ブログを毎日書くようになってからは、友人リクエストが増えた。ブログの内容を面白いと言ってもらえることも増えた。それが嬉しかった。張り合いが増した。

もっと交流を持ちたいと、今度はスカイプを開放した。すると、ロシア人からスカイプのリクエストが急激に増えた。こんなに簡単に、ロシア人との繋がりが広がることに驚いた。

ブログの著者として、プロフィールの写真を自分の顔写真にした。友達リクエスト・スカイプリクエストがますます増えた。

好きなことをひたすらやり続けること。今できることを、1歩、1歩進みながら、試行錯誤して行けば、この道はどこかへつながっているのだろう。

ある日、ロシア人読者から質問メールが来た。

「あなたは何のためにブログを書いているのですか？ ロシア語はほんのわずかで、残りは全部日本語で書いている記事がたまにあるけれど、そうやって誰かに日本語を教えているのですか？」と。

すごく考えてしまう質問だった。考え続けた末、辿りついた結論は、「私は自分のために書いています」だった。でも、そう答えながらも、私の心の中には、違和感が残った。

本当に自分のためだけだろうか？ それで良いのだろうか？ この問いが今のこのタイミングで来たのは、きっと意味がある。もっと掘り下げて考えてみなくてはと感じた。

「自分のためよりも、誰かの為に書いているという意識が必要なのかもしれない」セッションでそう口にすると、堀口さんは、「自分のためにから、相手(読み手)のために、と視点を変える時期に入ってきたんですね」と言った。その返答で、自分の中にあった「人の役に立ちたい、お手伝いがしたい」という思いを認めることができた。

ブログを始めて半年ほどで、自分がロシア人の日本語学習者の役に立てることを、実感できたことが嬉しかった。ロシアに留学までしておきながら、仕事でもロシア語を活かせずにいて情けないと自分を責めていた。でも、役立てる道が身近なところにちゃんとあった。

私がロシア語を学んだ意味が、ようやく自分の人生とつながった。

人のために努めた結果、自分のロシア語が上達していたことにも気づいた。相手の役に立とうと思うことで、自分のことが磨かれていった。

「満たされることで入ってくる」

「相手の幸せを願うことで自分も幸せになる」

いつかの堀口さんの言葉が実感をともなって、体中を駆けめぐった。自分のやってきたことはこれでよかったのだと、自分が満たされた気持ちでいっぱいだった。

ゆるすこと

セッションを始めて1年。季節はまた秋の入口に立った。頬を撫でる風は爽やかなのに、私の気持ちはくすんでいた。

新しい職場で、仕事になかなか慣れていなかったのにもかかわらず、誰かが休憩で部屋に入ってくると、仕事の手を止め自分から話しかける。「相手をした方がいいよね、相手をしなくちゃ」と思っていたから。社会人として、それが常識だと思っていたから。

しかし、本心は、仕事に慣れていなかったから、なるべくなら、相手をするよりも、自分の仕事に集中したかった。

だけれども、自分の仕事に集中して、相手の話を聞かないことは、わがままな奴だと思われるだろうから、話し相手になる方がいいと思っていた。

どうやったら、わがままに思われず、自分の仕事を優先させることができるのか？ セッションで考えることにした。

一通り話しを聴いた堀口さんが言った。

「美峰さんの仕事はその人の面倒を見ることじゃないですよね？」

「違いますね」

「じゃあどうして、そういう行動を取っているんでしょうね？」

「そうしないと相手に悪いかなーと。誰かが部屋に入ってきて、相手にしないでいると、気を悪くするんじゃないかと思って…」

「なるほど。話し相手にならないと、自分は協調性のない嫌な人になるし、話し相手にならないと、相手は気を悪くすると…」

「あ、でも、これって私が勝手に相手のことを決めつけている？」話していてまた気づいた。

そこで、新しいルールを考えた。

「やるべき仕事があるとき、本当に忙しいときは、仕事に集中する。余裕があるときは、話し相手になる」。なぜ、こんなに普通のルールが、ずっと自分の中にできていなかったのか不思議だった。

週明け、実際にやってみた。何も問題はなかった。相手は特に気を悪くした様子もなく、普段通りだった。なんだこれでよかった。拍子抜けだった。

いったい今までの私は何だったの？ 勝手に相手の感情を想像して決めつけたうえに、自分の仕事が進まないのを、人のせいにしていただけじゃないの。

毎回、相手をしなくなった分、仕事ははかどるようになった。

しかし、単に肉体的な疲れだけじゃないものを、その頃感じていた。

ロシア人とのスカイプは小休止中だった。スカイプを楽しむ気持ちの余裕がない。人の話を聴ける状態になっていないと感じた。

次のセッションで、一体何に疲れているのか探ってみることにした。

「仕事ははかどるようになったのに、疲れていますね。疲れの原因が、他にもあるような気がしています」と私は、話し始めた。

「疲れているんですね。疲れると、何かにとり憑かれるとも言いますしね。本当に痛いところは、痛すぎることに段々慣れると、痛いという信号を送らなくなって、痛くないことになってしまうんです。だから、2番目のところが、本当に痛いところとってしてしまうんです。前回のセッションで、2番目の痛いところに気付けたので、今日は本当に痛いところに気づけるのかもしれませんがね」

「え、そうなんですか？ 本当に痛いところ？」

「前回のセッションで、人のことを勝手に、そう思うだろうと解釈しているというのがありましたよね。話し相手にならないと悪い。そうしないと、協調性のない人に思われてしまうと、自分本位に想像して空まわりになっているというのがある。つまり、対応していない自分はだめなんだと、自分を責めているところがありますね。きっと、美峰さんは、自分を許すことが必要なのかと思います」

「自分を許すこと？」

どうして周りに良い人と思われたいのか？

自己犠牲をしてでも、相手のことを優先していたが、結局は、自分を責めることになっていた。

冷たい人と思われたくない。

自分はやりたいことをやったらいけない。

そういう思い込みがあった。それは何故？

ふと、頭によぎった出来事があった。

ロシアに留学したいと親に相談をしたとき、「小さい時からわがままを聞いてきてやったでしょ。大学生になっても、まだ、わがまま言うの？ 地元を離れて遠い土地への大学進学もさせてやったのに」と言われた。

だから、「もうこれ以上はわがまま言わないから、これが最後のわがままにするから…」と自分の中で親に固く約束し、ロシアに留学した。

そのときから、「求めることは許せないこと」と考えるようになった。

留学から帰ってきて、ロシアのことは家族に話さないようにしてきた。

最大のわがままを無理やり押し通した、留学先のロシアでのことを話しても、家族はいい気持ちがないだろうと思ったから。

いいや、そうじゃない。何より自分が辛かったのだ。ロシア留学のことを思い出すたび、それが楽しい思い出であればあるほど、出発前の陰悪な空気が私を取り囲み、全身を罪悪感で満たしてしまう。それが耐えられなかった。

時折、海に出掛けることがある。砂浜に立つと、視線の先には佐渡ヶ島が横たわる。さらにその先はロシアなのだと思うと、不思議な懐かしさに包まれる。そして、近いのに遠い存在なのだなと思い知らされる。

一時期、県外での就職も考えた。自分が他の土地に行くと言ったら、家族は何て言うだろう？　きっと、また、わがままと受け取られるだろうなと思った。そして反対されるに違いない。もうあんないたたまれないやり取りは繰り返したくなかった。だから、諦めた。今も地元を離れないようにと、実家で家族と暮らしている。

わがままと言われるのが無性に怖い。

もし誰かに対してわがまますべてを言ってしまったらどうしよう。

だから、その前に、相手の気持ちを勝手に判断する癖がついた。

ずっとそうしてきた。

そういえば、何度か彼氏から言われたことがある。

「もっとわがまますべてを言っているよ」私は戸惑った。

え？　私はわがまますべてを言っているの？　でも、わがまますべて何？

何がわがまますべて何がわがまますべてじゃないのか、私にはもうわからなくなっていた。

そのとき、堀口さんが言った。

「あれは、本当にわがままだったのでしょうか？」

セッション中、涙が次から次へと溢れ、止まらなくなった。

自分が色々と考えて決断したことだったのに、気持ちも聞かれずに、わがままと言われたことがショックだった。自分の気持ちを無視されて言われた気がした。

「あんたは考えが浅いから」と言われたとき、自分としてはよく考えた結果だったから、丸ごと否定された気がした。

自分は悪くない。どうして留学したいのか。なぜ今なのか。金銭的なこと。何かあってもすぐには帰れない日本とロシアとの距離。それが家族に与えるであろう不安。よく考えて結論を出したのだから。

そのときは、否定されたことだけが頭に残り、傷つき、親の気持ちを私も聴いていなかった。

今ならわかる。親の立場からしたら、娘を遠い異国の地へ留学させることがとても心配だったのだろう。

自分も相手も悪くない。

お互いに気持ちを話せていなかったし、聴けていなかった。

相手の気持ちに寄り添うことがあのときはできていなかっただけ。

ロシアに留学したのに、ロシア語に関係する仕事に就けなかったこと。

語学サイトに登録しているのに、なかなかブログが書けなかったこと。

好きなのに、しなかったこと。

好きなのに、好きな気持ちをずっと押し込めていたこと。

留学を終えて実家に戻った日から、私の中の私はずっと、誰にも見えない所で膝を抱えてうつむいていた。夢を叶え、好きなことを仕事にしている人を見ると、羨ましかった。

羨ましくてどうしようもなかった。彼らはきらきらと輝いていて、その輝きが私には眩しすぎて、とても直視できなかった。

好きなことを手放したことも、夢を置いてきたことも、私は家族のせいにしていった。わがままを言って、家族との関係を悪くしたくないと、もっともらしい理由をつけて。

そういう自分の弱さが、彼らの光を受けておき出しになってしまうような気がして、怖かった。

どうか誰も気づかないで。私の傷をほじくり返さないで。私は今のままで十分だから、そっとしておいて。私はますますぎゅっと膝を抱きしめて自分の夢を閉じ込めた。

セッションを始めて1年経って、ようやく、自分をせきとめていた理由を、堀口さんの質問によって口にすることができた。過去を今の視点からもう一度眺めてみることで、解釈が変わった。

過去のわだかまりが、大粒の涙とともに流れていった。泣きながら私は救われていった。

心の中でひっそりとうつむく私の肩に手を置き、「辛かったね。でも、誰も悪くなかったよ」と言ってあげられた気がした。

私はようやく顔を上げた。夢を叶えている人たちは、私にはやっぱりまだ眩しい存在だけれど、でももう目を逸らしたりしない。

街で見かける学生達の制服が、半袖から長袖へと切り替わった。太陽の存在は、いつしか疎ましいものから、好ましいものへと変わっていて、頭上にある空は、どこまでも高くそして青い。

そんな絶好の行楽シーズンに、堀口さんのクライアントさん総勢 10 名で、伊勢神宮に詣でた。この日は秋にしては気温が高めだったので、堀口さんは、エンジニアブーツを履いてきてしまって、それをちょっと後悔していた。

参拝に訪れるおびただしい数の人、人、人。お伊勢さんの吸引力のすごさを目の当たりにした。

人ごみにもまれながら、神殿へと向かってゆるゆると動く。都会の雑踏とは違い、喧噪のなかでも静寂を確かに感じられる。みんな胸の中に、どんな願いを秘めているのだろうか。これだけの数の人に願いを突き付けられて、神様はうろたえたりしないのだろうか。

ふっと近くにいたご婦人方の話し声が聞こえてきた。

「もうね、お願いするなんてことしないの。ただ“ありがとうございます”ってお伝えするだけよ」そういえば、堀口さんもブログでそんなことを書いていた事を思い出した。

神様に感謝を伝えたら、どんな気持ちになるだろうか。私も試してみることにした。

お賽銭を投げ、呼吸を整え、目を閉じ、手を合わせる。ただただこれからの幸せを願い、そして今までのありったけの感謝を神様にお伝えした。

清々しい気持ちでお参りを終えた。「ありがとうございます」という機会をもらえたことに、また感謝したくなった。

この旅行でご一緒した方達とは、大半が初対面だった。しかし、不思議と初めて会ったという気がしなかった。5月のひとみずおアワードでお目にかかった、ゆかりさんと康子さんも参加していた。見知った顔があると、やはりホッとする。

どういう経緯で堀口さんのコーチングを受けるに至ったのか、セッションで自分がどう変化したか、ということから、趣味や好きなアーティストの話まで、話題には事欠かなかった。

行き帰りの近鉄特急、神宮内の散策、鳥居をバックにした記念撮影、おかげ横丁での食べ歩き、、、どのシーンを思い出しても、みんな笑っている。本当に楽しかった。

旅先では気持ちがオープンになるし、初対面の人には格好つける必要もないから、普段言えないようなことも何だか言えてしまう。あれ、これって堀口さんとのセッションに似てるんじゃない？

知らない人と旅をするのもありだな、と思った。

その後のセッションで、伊勢効果は何かあったかと、堀口さんに聞かれた。

「2日、3日に1回のペースで、便秘がちだったところが、毎日になったんです！」

「それは、よかったですね。自分に出すことを許可したんでしょうね。心と体はつながっているから。特に、この前の罪悪感を手放したセッションが利いてますね」

気分爽快だった。心も開放された感じがした。もう少し自分らしさをだしていいかも、と素直に思えた。

伊勢の旅路で、堀口さんが撮ってくれた思いっきり笑っている写真。それを、ブログのプロフィール写真として使うことにした。ネット上で不特定多数の人に、自分の顔をさらすのは初めてのことで、とてもドキドキした。大きく口を開けて思いっきり笑っている写真を選んだ感じは、自分の中で、かなり新しかった。挑戦と言ってもいいくらい。

笑顔を出すことで信頼度が増したのか、ありがたいことに、スカイプやブログページへのメッセージが、ますます増えた。

気づいたら、シェアをする側に辿りついているのを感じた。それまでブログで書いていたのは、自分の日常をロシア語で書き記しただけの、ただの日記にすぎなかった。ロシア語の文章を誉められると嬉しくて、それだけで満足していた。

でも、わざわざ自分のページに足を運んでくれる方の存在を意識したら、なんだかこのままではいけないような気がした。一见さんには常連になって欲しいし、すでに常連さんの方には、末永くお付き合いしていただきたい。それに、せっかくだったら、読んだ人に何かを吸収して自分の物にしてもらいたい。

これからの私が目指すのは、読んだ後もじんわりと思考が続くようなもの。与えるだけや与えられるだけの一方通行ではない、双方向のやりとりが生まれるようなもの。

さらには、私のブログの読者が、私のブログで得た知識や情報を、新たな読み手に発信したくなるようなもの。そういうものを、提供したいと思うようになった。

みつばちが、花から花へと飛んで受粉をして、また次の世代の花が咲くように、私のブログのネタが、いろんなどころで花を咲かせてくれたらなんて素敵だろう。今もまだ試行錯誤は続いているが、自分のベースの部分が出来たのは大きな強みになった。

目には見えないもの

紅葉が深まったある日、菊祭りで混み合う神社に到着し、一人で参拝を終えた。

すっきりとした気分でポシェットから携帯を取り出すと、彼からの着信が数件とメールが2通という表示が出ていた。慌てて開いた2通目のメールには一方的に、怒った内容が書かれていた。

その文面を見た瞬間は、さすがにムツとした。私がおざと着信を無視していると判断したようだった。

自宅からかなり離れたところにある神社を目指して車を走らせていた私が、電話やメールが来たことに気づかなかったのは、無理もない。私のiPhoneは、堀口さんが巴里へ行ったときに買ってきてくれた、ピンクの柔らかいレザーのポシェットの中で、快適に横たわっていたのだから。

元はと言えば、彼が仕事を理由に約束を、ドタキャンしたことが発端。なのになんで私が怒られるの？ 文句を言いたいのは私の方！ よっぽどそう返信しようかと思った。

しかし、前回のセッションの応用問題が来たのだらうと思えた。言葉じゃなくて、気持ちを理解してみること。

この頃、私は、堀口さんの「聴くことは幸せにつながる」セミナーに、2回参加していた。このセミナーの中でも特に印象的だったのが、「怒り」の奥にある「願い」に気づくこと。

よくよく相手のことについて想像してみようと試みた。

もしかして、彼の怒りの奥には「願い」があるのでは？

目には見えないものが見えるだろうか。

彼は本当に怒っているだけ？

もっと他に伝えたい気持ちがあるのでは？

私は何度もそのメールを読んだ。繰り返し何度も何度も。読み返すうち、怒りの言葉の奥に隠れた、彼の本当の気持ちが浮かび上がってきた。

それは、ドタキャンしたことを、心から申し訳なく思っている気持ち。

何とか仕事をやりくりして、私と会おうとしてくれている気持ち。

メールではなく、直接電話で、言葉で伝えたいという気持ち。

ああ、そうか、これだったのか。

私は彼に電話を掛け、車を運転していて、すぐに対応できなかったことを、素直に伝え謝った。彼も「そうじゃないかと思ってた」と笑いながら言った。

その言葉にホッとして、自分の心がとっても温かくなった。

お参りをするまでは、何となく悲しい気持ちで、家族連れやカップルの人たちを見ていた。私はひとりぼっちで来ていて、手をつなぐ相手がない。今日はこんなに寒かったっけ。日が落ちて、急激に冷えてきた空気から守るように、上着のポケットに突っ込んでいた手を、さらにぎゅっと握りしめた。

彼との通話を終えて周りを見渡してみると、参道をそぞろ歩く彼らの表情は、みんな穏やかで優しい。この次は彼と一緒に来よう。そう決めたら、手の冷たさが気にならなくなった。再び温かい気持ちに満たされると、彼の今までの行動が、新たな意味を持って蘇ってきた。

ああ、あんなことをしてくれたな、こういう言葉をかけてくれたな…。あの時も、あの時も、あの時も。数えきれない一つ一つのことがこんなにも刻み込まれている。

彼に対する気持ちが「好き」から「愛おしい」に変化した。心の距離がぐっとちぢまった。

メッセージ

やりたいことをする、を続けて、さらにその先のやりたいことを考え始めてから、不思議なことが起こり出した。

私の職場は、社会人向けの資格取得スクール。その講師を務める先生が何人もいる。

ある時、立て続けに先生の身の上話を、聞かせて頂くことになった。こちらから水を向けたわけでもなく、問わず語りに先生自らが口を開いたのだ。

その資格を取る前にしていた仕事や生活のこと、どういう思いで資格を取って、その後どんな情熱をもって仕事をしてきたのか、さらには講師の職に就くに至った経緯など。

私は、ありがたいお話を聞かせてもらったと思った。それにしても、こんな偶然の連続ってあるんだ。でも、本当に偶然かな？

この出来事をセッションで堀口さんに話した。

堀口さんは、「それは美峰さんへのメッセージですよ。“いつまで今の仕事を続けるのか？”という。神様がその講師の先生たちを通して、美峰さんに問いかけているんですよ」と言った。目に映るすべてのものが、メッセージなのだと教わった。

思わずハッとした。今まで、そういうことは、たまたまだと思ってスルーしていたのだ。

今の仕事は私の「本当にやりたいこと」ではない。

じゃあ、いつまでそれを続けるの？

一体、いつになったらやりたいことを仕事にするの？

What do YOU want? 堀口さんに薦められて観た映画『きみに読む物語』で、主人公が恋人に放った言葉が私にも突き刺さった。

みんな自分で決断している。選択している。そして、その選択が導く方向に足を進めている。私は？

数日後、職場で一人残業をしていて、地震に見舞われた。はっきり地震とわかるほどの揺れが長く続いた。あの3月の大地震の恐怖がフラッシュバックする。

ここで私は死ぬのかな？ 上から天井が落ちてきて、その下敷きになってしまうのかな？ この事務所にひとり取り残されてしまうのかな？

机の下に潜り込んで揺れが収まるのを待つ間、私はイヤと言うほど悟った。

違う。ここは私の死に場所じゃない。私はここで死にたくない。もし、仕事の最中に死ぬような目に遭うとしたら、そのとき私は、自分のやりたいことを仕事にしたい。

よし、決めた。来年の夏には今の仕事を辞めよう。

そのわずか数日後。職場に支社長がやってきた。そして、私がいる部署が閉鎖になること、それに伴い私は職を失うこと、そしてそれが夏くらいになることを告げられた。

「え？何、これ？ 誰か私の心を読んじゃったの？ 自分から辞めますって言う前に、向こうからその状況が勝手にやってきた」

辿りつきたいところを決めたら、後はお任せとは、こういうことなのか！と自分でも気づけた。

再会

「美峰さん、ずっと夢を封印していたわけじゃないですか。きっと、神様は、封印しているぞ、とすることを気づかせるために、なにかノックしていたこともあったと思うんですけど、何か周りから役割を頼まれたことありませんでした？」と、堀口さんに訊かれた。

「そう言えば、ロシア人を紹介されたり、姉の知人から、留学生の世話を頼まれたりしましたね。ずっと前から、生活のお手伝いをやってみたいと思っていました。寮母さんの存在です。ロシアから日本に観光しに来る人に、宿泊場所を提供する。ユースホステルや、寮みたいなのをやりたいですね。希望者には、プチ日本語教室なんかもやってあげたり」と、私は思わず口にした。言いながら自分でも驚いた。言葉が勝手にスルスルと出てくる。そうか、私のやりたかったことって、これなんだ。

実は、これ以前のセッションでも、堀口さんから何度か質問されたことがある。

「ロシア語を活かしてやりたい事って何ですか？ 何がしたいのですか？」

その度に、私は、答えるのにもたついた。

語学を生かす職業として、真っ先に思い浮かぶと言えば…、通訳、翻訳、ロシア語講師。だが、どれもしっくりこない。そういう自分をイメージできなかった。イメージが浮かばないということは、私はそこを目指していないのだろう。

結局、私は、ロシア語で何がやりたいの？

ストレートに訊かれたときには出てこなかった答えが、角度を変えた訊き方をされたことで引き出された。そして、私は気づいた。あのとき、私が確かに抱いていた夢に。

留学から戻るときに、私は、自分の夢をロシアに置いてきた。そして、夢はそのままそこで凍りついた。ロシアに関する情報を見聞きするたび、うきうきする気持ちと、後悔に似た気持ちが同時に沸き起こった。好きなものはそこにあるのに。ちょっと、いやかなり遠いけど、手を伸ばせば掴めるのに。

でも、好きだからこそ手を引っ込めてしまった。怖かった。好きなものを求めたら、自分も含めてまた誰かを傷つけそうな気がした。まるで恋愛みたいに、好きな対象には、妙に臆病になってしまう。

しかし、ロシア語を好きなことを認めて、過去の傷も癒えたら、自分の心の声を拾えるようになった。私がやりたいのはこれだと、聞こえてきた。ブログの読者や、周りの人からも気づかせてもらって。そして、頭の中に、ぱあーっとイメージが広がった。

ずっと昔にやりたいと思っていた、いつしか胸の奥底に閉じ込めてしまった夢。

サロンのような空間を提供したいとずっと思っていた。

人が集い、語らい、それぞれの経験や情報を共有する。

みんなが涙を流し、みんなが笑顔になる。みんなが癒され、みんなが満たされる。

オレンジ色の温かなオーラにみんなが包まれている。私は傍らで微笑んでいる。

遙か遠い北の大地でカチカチに凍っていた私の夢が、15年の時を経て、今、ようやく解け始めた。

好きだと認めたから。叶えるために手を伸ばしたから。近づくために歩き出したから。

当たり前といえば当たり前だけれど、好きという思いこそが、夢を形にする原動力なのだ。このシンプルな思いのほかに何が必要だろう。

この原稿を書いている過程で、いろいろな記憶を辿った。訪れた場所。出会った人たち。交わした言葉。経験したあれこれ。あの時の私はどうだっただろう？ どんな表情をしていただろう？ 楽しかったことは何？ 悲しかったことは？

そんな風にして、ロシア留学時のことも、アルバムをめくるように振り返っていたら、アルバイトで、ロシア人に日本語を教えていたことをハタと思い出した。私は、ちゃんと自分の心が求めることをやっていたのだな、とちょっぴり嬉しくなった。

それから少し経ったある日、私が日本語を教えた生徒さんの一人からメールが来た。びっくりした。その子とはもう10年近く音信不通だったのに、こういうタイミングでメールが来るなんて。

しかも、このメールは実は迷惑フォルダに振り分けられていた。それをたまたま見つけて拾い上げたのだ。よかった、いつものように機械的に全削除しなくて。一見偶然に思えるけれど、これもやっぱり必然の出来事なのだろう。

メールの件名は、“To Miho from Moscow”。

瞬間、モスクワの街の空気が風になって、吹き抜けた感じがした。

ああ、モスクワが私を呼んでいる。このメールを迷惑メールのフォルダまで取りに行ったように、夢をここまで取りにおいでと言っている。

私はその子にこう返事を書いた。「Встретимся в Москве! (モスクワで会おうね)」